

# 教育ビジョン

生成AI × 教育DX × Well-being時代の学びのデザイン

初等中等教育（義務教育～高校）／2030年次期学習指導要領（小学校施行）を見据えて

2026年1月

株式会社 情報通信総合研究所(ICR)  
教育イノベーションラボ  
ラボ長 平井聰一郎



Education Innovation Lab, ICR

# 社会構造の転換が、教育の再定義を迫る

これまでの「教育→仕事→引退」という一方向的な3ステージモデルは崩壊し、学びと働きが循環する「マルチステージモデル」が主流化している。

## Society5.0の到来

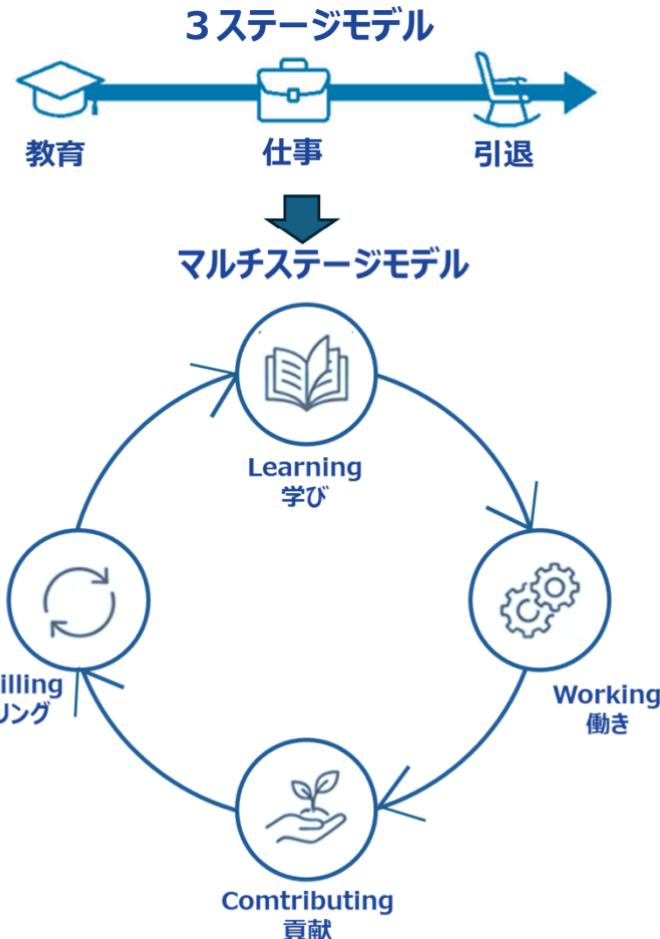
人とAIが協働し、新たな創造する社会へ。

## 人生100年時代

誰もが学び続ける「社会インフラ」としての教育が不可欠に。

## 人口減少と多様化

画一的な教育から、一人ひとりの価値を最大化する教育への転換が求められる。



# ICT基盤は整備されたが、「学びの文化的停掃」が改革を阻んでいる

GIGAスクール構想によりハードウェアは整備されたが、授業文化や評価手法の変革が追い付いていない。

1. 知識伝達型の単元・教材構造
2. 知識偏重の評価
3. 教師の“余白”の欠如
4. 機能しないカリキュラム・マネジメント
5. 学校管理職のアンラーニング不足



# 課題解決への道筋：Minimum Viable Reform (MVR) による実践的アプローチ

根本原因に対し、実証に基づいた具体的な対応策とKPIを一体で設計し、改善サイクルを回す。

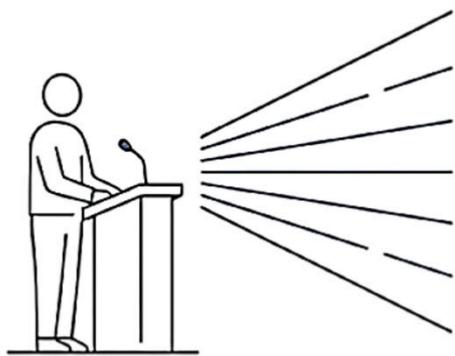
原因/	対応策 (Minimum Viable Reform)	KPI (Key Performance Indicator)
単元構造が知識伝達型	中核的概念に基づく「単元再構造化テンプレート」の採用(AI支援)	再構造化単元比率 (年度内30%→翌60%)
評価が知識偏重	形成的評価ループリックの標準化 (AIフィードバック併用)	ループリック活用率 (学期内50%)
教師に"余白"がない	「やめることリスト」に沿った SchoolBPRの実施	授業準備時間の創出 (+90分／週)
改善サイクルが機能不全	教育DXダッシュボードと月次 「授業デザインレビュー」の導入	レビュー実施率100%、改善提案採択率40%

※KPI目標値は先行自治体の実証事例やICRパイロット校の実績値を参考に設定。

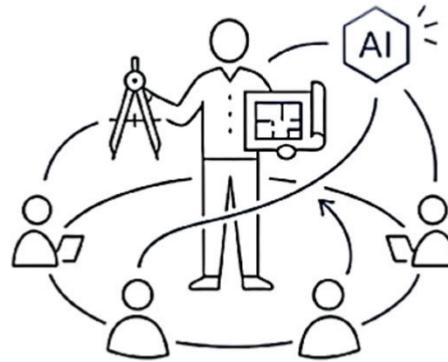
# 教師を「知識の伝達者」から「学びをデザインする高度専門職」へ

AIや学習データの活用は、教師を代替するためではない。

教師の専門性（問い合わせの設計、思考の可視化、形成的評価）を拡張し、子どもの学びの質を高めるための基盤であり、子どもの学びの質を高めるための基盤である。



知識伝達者



学びをデザインする高度専門職

## AI's Role:

**NOT** : 教師の代替 (Replacement)  
**IS** : 専門性の拡張 (Augmentation)

# 「政策の意図」を「現場の実装」へ。理念と実践を繋ぐ統合モデル

政策の要請を、「学校組織」「授業」「評価」の設計レベルに落とし込むことで、  
「理念—制度—実践」が循環的に連動する。

## 政策的三本柱—Policy Pillars

質保証  
(Quality Assurance)

DXによる効率化  
(Efficiency via DX)

AIガバナンス評価  
(AI Governance)



政策の意図を現場実装に翻訳する

## 現場三本柱—Classroom Pillars

学びの  
多様化と質保証

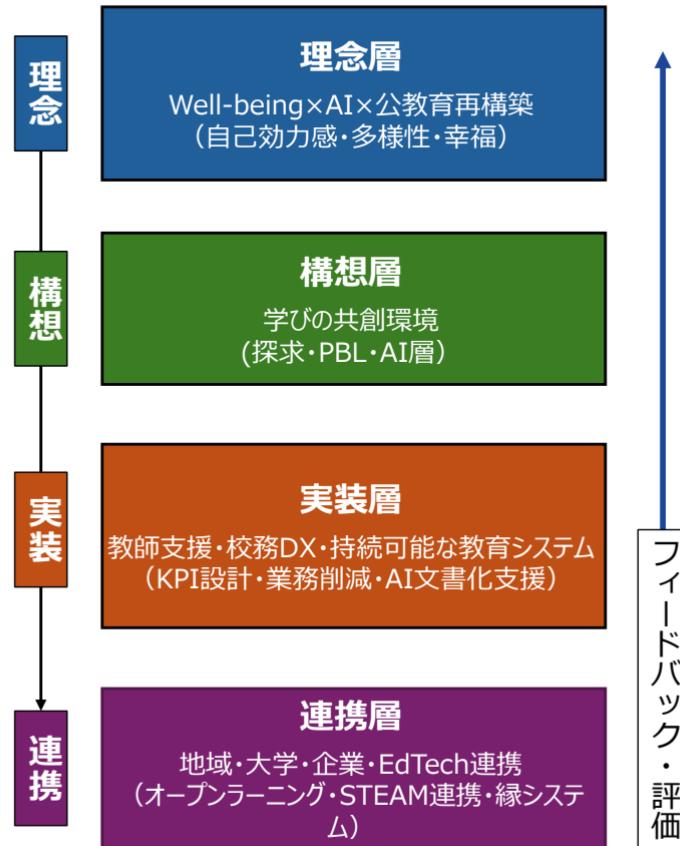
教師の  
エンパワーメント

データとAIの  
統合活用

## 4層構造モデル

# ビジョン実現のための 4層構造モデル

理念から実装までを連動させ、  
教育DXを単なる技術導入ではなく  
「学びの再設計プロセス」として  
位置づける。



# 教育エコシステムの中核を担うデータ連携基盤「縁システム」

## What it is:

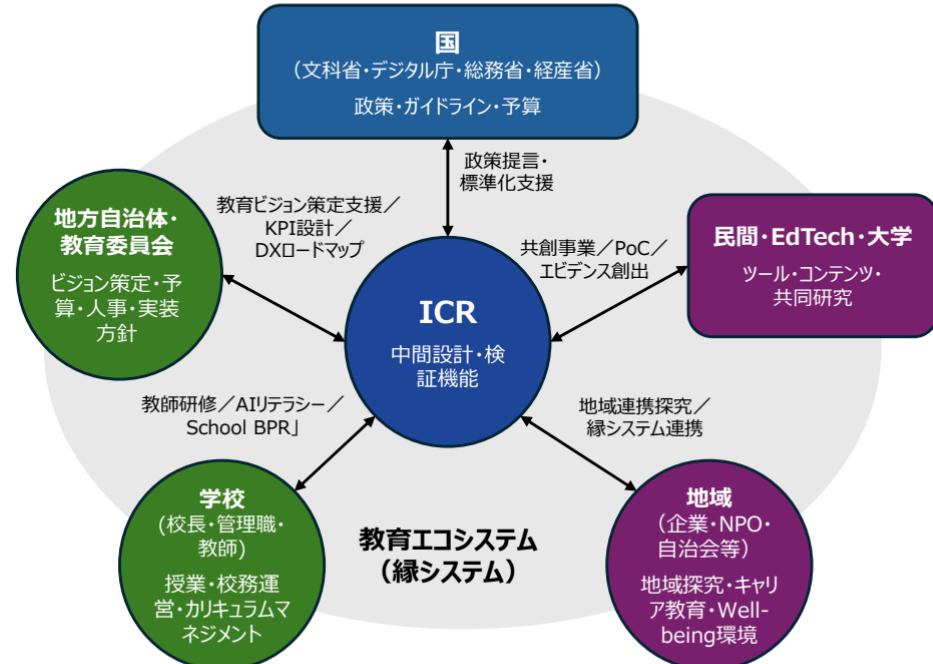
行政・教育・企業（地域）のデータを統合し、教育のシームレス化を図る「人とデータの共創基盤」。

## Why it Matters:

- **学校DXを超えて**：単なる校務効率化に留まらない。
- **次期学習指導要領の実装基盤**：中核的概念に基づく単元設計や個人内評価など、新指導要領が求める改革をデータ面から支えるアーキテクチャである。

## Functions:

- ✓ 学習・校務・地域活動データのAPI統合管理
- ✓ 児童生徒単位での教育・健康・福祉データの安全な連携
- ✓ 生成AIを安心して利用できる教育環境の提供



※縁=血縁（家庭）、地縁（地域）、社縁（社会）

# AIは思考を深化させる「知的触媒」であり、業務を効率化する「実務パートナー」である

AIは学習者の思考を代替するのではなく、思考を引き出し・揺さぶり・深化させる  
**知的触媒 (Intellectual Catalyst)**である。

			
分類	<b>生成AI (Generative AI)</b>	分類	<b>汎用AI (Operational AI)</b>
主な目的	<b>思考の深化・構造化 (AIとの対話)</b>	主な目的	<b>校務効率化</b>
活用領域	<ul style="list-style-type: none"><li>・探求活動支援 (問づくり、仮説整理)</li><li>・授業設計、教材開発、形成的評価</li></ul>	活用領域	<ul style="list-style-type: none"><li>・出欠管理、文書起案、調査回答</li><li>・データ分析、EBPM支援</li></ul>

**信頼性 (Reliability)**

**安全性 (Safety)**

**公平性 (Equity)**

# 次期学習指導要領改訂と連動した、実現可能な4年間の実装ロードマップ

2025-2028年度を、単なるDX整備ではなく、新指導要領を“使いこなすための実装準備期間”として位置づける

年度	フェーズ	主な施策	学習指導要領改訂の動き
2025	Poe開始	パイロット校設計、生成AI授業実証	論点整理
2026	データ基盤構築	校務・学習データ統合、緑システム接続	答申とりまとめ
2027	モデル開発	Well-bein教育モデル、教師研修	答申を踏まえ、改訂告示に向けた調整
2028	全国展開	政策・自治体・企業連携モデルの普及	移行期間の本格化、教科書検定

# ICR教育ビジョンが実現する教育の未来像

観点 (Perspective)	Before (現状)	After (ビジョン実現後)
学習形態	教師主導・一斉授業	<b>AI伴走型探究学習</b>
教師の役割	知識伝達者	<b>学びをデザインする高度専門職</b>
校務運営	紙・属人的処理	<b>AI支援・データ駆動型運営</b>
教育成果	学力中心	<b>Well-being・創造・社会参画</b>

この変革は、「AI倫理コード」「教師ガイドライン」を前提とし、安全・信頼・透明な教育AI環境の上で実現される。

# 「政策一現場一技術」の溝を埋める、教育エコシステムの設計者としてのICR

国・自治体・学校・民間企業が連携するエコシステムにおいて、**中立的ファシリテーター**として横断的支援を提供する。

## 1.政策連携

文科省、デジタル庁等との連携支援  
データ標準化、AIガイドライン策定支援

## 2.現場伴走

KPI設計、学校改革支援  
教師向けAIリテラシー研修

## 3.研究・評価

Well-being指標と学力保証を両立させた効果検証  
教育の社会的ROI分析



# 教育の再定義：人間の知性と創造性を拡張する、 共創パートナーとして

AIは教師や学習者の代替ではない。  
人間の思考・完成・判断を深化させ、  
**問い合わせを磨き、価値創造の速度と質を高める共創パートナー**である。

学校内の改革に留まらず、地域・大学・企業との共創を通じて、  
学び・働き・参画が循環する**マルチステージ社会**の基盤を形成します。

お問合せ先  
ICR教育イノベーションラボ  
副ラボ長 真子 博  
[h.manago@icr.co.jp](mailto:h.manago@icr.co.jp)  
**Education Innovation Lab, ICR**